

京大医学部から ラグビー日本代表



司令塔のスタンドオフとしてチームを引っ張る大鶴
(京大宇治グラウンド)

京大ラグビー部主将の大鶴誠(21)「医学部医学科4年」が23歳以下(U23)日本代表に選出され、4月のオーストラリア遠征で「桜の戦士」の一員としてプレーした。京大は国内リーグ校の一つでもあり百年以上の歴史を持つが、スポーツ推薦のない同大学で日本代表が生まれるのは戦後間もない時期まで遡る。その環境で、医師という夢とラグビー日本代表という文武の極限に挑み続けている。

一般公募でU23「桜の戦士」に

兵庫県西宮市出身。父、兄も経験者というラグビー一家で、幼い頃から親しんだ。父の仕事の関係で京都で過ごした時期があり、鴨川河川敷で家族で練習した経験も。父は救急医でもあり、その背中を見て育った。小学校の卒業文集には「将来の夢はラグビー日本代表と医師」と記した。

憧れの兄を追うように灘高(神戸市)へ。ラグビー部でも活動したが、進学校の同高は慢性的な部員不足のため合同チームを組むのが常。そんな逆境でもトップ選手の動画を見てプレーに取り入れるなど工夫を重ね、技を磨いた。猛勉強の末に京大

に現役合格すると、同じく医学部とラグビー部で努力を続ける兄を追いつつ、勉強や実習で多忙な環境と部活を両立させてきた。

そんな日常がこの半年で一変。日本ラグビー協会がU23代表編成の枠に新たに一般公募での募集を盛り込



オーストラリア遠征に臨んだラグビーU23日本代表のメンバー。前列右端が大鶴(日本ラグビー協会提供)

文武両道、貪欲に追い求め

スキルやハングリー精神PR、先月豪遠征に参加

んだ。同世代のトップ選手と同じ環境でプレーできるチャンスに、「球拾いでも何でもいいから参加したい」と挑戦を決意。自己PRの動画は、司令塔のスタンドオフとしてのスキルだけでなく、ハングリー精神や成長意欲も強調した。応募者約30人の中で合格者3人の中に選ばれ、事前合宿を経て4月の遠征メンバーに残ったのは大鶴だけだった。

遠征では地元クラブとの試合に途中出場。「あの(桜の)ジャージーを着て肩を組んで国歌を歌った時はこみ上げてくるものがあった。本当に代表になったんだな」と率直に喜ぶ。帰国後はトップチームから練習参加のオフアワーが舞い込むなど視界は良好だ。

主将として臨む秋季リーグの時期に病院実習が始まるなど多忙な日々は続くが、貪欲に「一歩を追い求めたい」。京大は2部に当たるBリーグに所属しており、「主将として責任を持って先頭に立ち、目標のAリーグ(一部)昇格を達成する」と力強く語った。(三誠慎太郎)



QRコードを読み取り特集ページにアクセスすると、より詳しい記事を読むことができます。
(閲覧には会員登録が必要です)

京大ラグビー部 1910年に旧制三高蹴球部として創部。国内では慶大に次ぐ歴史を持つ。27年度から全国3連覇を果たし、大学選手権に5度の出場。52年に英オックスフォード大戦に出場した柴垣復生氏など日本代表選手も輩出している。OBにノーベル化学賞を受賞した野依良治氏や前駐中国大使の垂秀夫氏、日本ラグビー協会元副会長の和田文男氏など。